

## 權德輿の初任官

岡 本 洋 之 介

はじめに

中唐の權德輿（七五九～八一八）は、建中から元和年間にかけて文壇にあつた人物である。詩人としては目立たず、權德輿の詩文を論じた研究は少ない。

權德輿は乾元二年（七五九）に潤州で生まれた。大曆二年（七六七）には父權皋を亡くす。主に江南地方で幾つかの幕職を経た後、貞元七年（七九一）、淮南節度使の杜佑と江西觀察使の裴胄とに招聘されるが、この時、權德輿を幕下に招きたいと願ひ出たそれぞれの上奏文が同日に都に到つた。その事が德宗の耳に達したのがきっかけとなり、翌年正月に太常博士となる。

この江南時期の權德輿の事跡はこれまでの研究で明らかにされている。ただし、入幕・離職時期を含め、諸論それぞれに差異が生じている。今回は、そのうちの一つ、權德輿がはじめて官についたのは誰のもとでの事であつたのかに關して、先行研究が韓洄・柳載（後に柳渾と改名）と二人の名を擧げる點の再検討を試みる。

なお、底本として用いた四部叢刊本『權載之文集』は『文集』と略記し、權德輿の作品名を省略する場合はその目録の記載に據つた。

—

韓洄に招聘された事が權德輿における官途の第一歩である、との立場を取る論には、金時俊（權德輿年譜）（1）、中原健二（權德輿年譜初稿）（2）、郭廣偉（權德輿年譜簡編）（3）、王紅霞（權德輿先世及行事系譜）（4）、嚴國榮（權德輿生平與交游考略）（5）などがある。

これら諸論が根據とするのは、『舊唐書』『新唐書』『唐才子傳』の權德輿傳に、

韓洄黜陟河南、辟爲從事、試秘書省校書郎。（『舊唐書』卷百四十八・權德輿傳）  
韓洄黜陟河南、辟置幕府。（『新唐書』卷百六十五・權德輿傳 『唐才子傳』卷五も同じ）

韓洄が黜陟使として河南へ赴いた際、權德輿はその幕僚として召され試秘書省校書郎となつた、と記載されている點である。試秘書省校書郎となつた事については、『唐才子傳校箋・第二冊』<sup>①</sup>で權德輿の項目を担当された吳汝煜氏の說や中原氏の論で指摘されるように、權德輿の父權阜の友人であつた梁肅が貞元四年（七八八）に爲した權德輿の母李氏の墓誌銘中に、

有子德輿、七歲而孤。夫人茹未亡之哀、躬徙宅之教。故德輿也、十五文章知名、二十典秘書。（『文苑英華』卷九百六十六・梁肅 權公夫人李氏墓誌銘）

權德輿が二十にして秘書をつかさどつた、と記されている點から確認し得る。

權德輿をその幕下に召したと伝えられる韓洄が黜陟使となつたのは、德宗の即位後間もない建中元年（七八〇）初頭である。『舊唐書』『新唐書』は、

（建中元年）二月丙申、遣黜陟使一十一人分行天下。癸卯、以戶部郎中韓洄爲諫議大夫。（『舊唐書』卷十二・德宗紀上）

德宗即位、起爲淮南黜陟使。（『新唐書』卷百二十六・韓洄傳）

黜陟使は全部で十一名任命され、韓洄はその内の一人として淮南地方を担当し、ほぼ時を同じくして諫議大夫の官を帶びた、と傳える。

韓洄が黜陟使として受け持った地域が、權德輿傳では「河南」、韓洄傳では「淮南」と異なっている點に關しては、貞元十年作の韓洄の行狀の中で權德輿自身が、

今上踐位、勵精理本。徵爲淮西淮南等道黜陟使、復拜朝議大夫。（『文集』卷二十・唐故大中大夫守國子祭酒潁川縣

開國男賜紫金魚袋贈戶部尚書韓公行狀）

「徵されて淮西淮南等道黜陟使と爲」つたと述べており、「淮西淮南」を担当したとみなすのがやはり穩當であろう。

もう一方の見解、すなわち權德輿が柳載によつて官を授かったと主張する研究には、蔣寅《大曆詩人研究・下》（『中  
の（權德輿年譜略稿）（權德輿作品係年）がある。

蔣氏は「是公非韓洄爲黜陟使所舉明矣。」と權德輿が韓洄に擧げられ官についたことを否定される。その根據として  
は、「韓公行狀」に見える、韓洄が黜陟使に任命されたものの赴任しなかったと傳える部分を提示しておられる。

今上踐位、勵精理本。徵爲淮西淮南等道黜陟使、復拜朝議大夫。攝衣登車、以澄清風俗爲己任。未及行、拜權判戶部  
侍郎、專判度支、賜金印紫綬。（『文集』卷二十・韓公行狀）

德宗の即位後、韓洄は召されて淮西淮南等道黜陟使となる。しかし、「未だ行くに及ばざるに」戸部侍郎へ移る。任地  
へ赴いてはいないのである。史書ではまったく觸れられていない點であり、なおかつ、『舊唐書』などではその韓洄に招  
かれたと記されている權德輿本人が「未及行」と言っている事は重く受けとめねばならない。

德宗が黜陟使を全土に派遣した件については、『冊府元龜』の記述が参考となろう。黜陟使十一名の名と担当した地域  
をそれぞれ擧げているからである。

建中元年二月、發黜陟使分往天下。以右司郎中兼侍御史陳何巡京畿、職方郎中劉濟往關內、刑部員外郎裴伯言往河東  
澤潞磁邢等道、司勳郎中韋縝往山南西道劍南東西川、禮部郎中趙贊往山東荆南黔中湖南等道、諫議大夫洪經綸往魏博  
成德幽州等道、給事中盧綸往河南淄青東都畿等道、吏部郎中李承往淮西淮南等道、諫議大夫柳載往浙江東西道、刑部  
郎中鄭叔則往江南江西福建等道、禮部員外衛晏往嶺南五管。（『冊府元龜』卷百六十二・命使第二）

この資料によれば、「淮西淮南」を担当したのは「李承」という人物である。韓洄ではない。「河南」へ赴いたのも別  
人で、權德輿傳において「韓洄黜陟河南」と記されている事と食い違う。

史書では「黜陟使となった韓洄」が權德輿を部下としたと記されている。しかし、『冊府元龜』が傳える黜陟使十一名  
の中に韓洄の名は見えず、しかも一方の當人である權德輿自身が韓洄は赴任していないと言っている。とすれば、「韓洄  
黜陟河南」という記事は否定される事となり、權德輿が韓洄の部下であつた事も成立しなくなる。蔣氏の説はのような  
觀點から唱えられたものであらうと思われる。

そして氏は、『文集』の「送馬正字赴太原謁相國叔父序」「與黜陟使柳諫議書」を取り挙げ、その記述から、柳載が江南に黜陟使として赴任してきた際に上表し推薦した事で權德輿は官を授かったと判断されている。

まず、「送馬正字序」であるが、これは權德輿と交際のあつた馬正字がその叔父である馬燧のもとへと旅立つにあたり、權德輿が爲した詩の序である。文中、二人の交流について書かれた個所に、

相國元昆今左常侍漢陽公之領郡丹陽也、予方僑居別部、備辱嘉薦、亟游其門。當時已見君新詩盈軸、日至鈴閣。

（『文集』卷三十九・送馬正字赴太原謁相國叔父序）

權德輿が相國の元昆、すなわち馬燧の兄馬炫のもとに出入りし、「備さに嘉薦を辱くし」ていた事が記されている。蔣氏はここで言う「嘉薦」がどういう推薦であるのかについて、『舊唐書』の馬炫傳に見える、

建中初、爲潤州刺史。黜陟使柳載以清白聞、徵拜太子右庶子、遷左散騎常侍。（『舊唐書』卷百三十四・馬炫傳）

馬炫が潤州刺史である時、黜陟使の柳載が馬炫の清白さを奏上したという兩者の關係を示すくだりを挙げ、「相國元昆今左常侍漢陽公之領郡丹陽」とは馬燧が建中元年に潤州刺史となったことを言い、權德輿が受けたこの「嘉薦」とは柳載に薦められたものを指すと判断されている。

しかし、「相國元昆今左常侍漢陽公之領郡丹陽也、予方僑居別部、備辱嘉薦、亟游其門。」とある文章は「馬炫が潤州刺史となり、私は折しも別部に假住まいしていて、素晴らしい推薦を頂戴し、馬炫の門に游んだ。」と讀むべきであり、蔣氏のように「公游馬炫門、備辱嘉薦、或即薦于柳載。」、「馬炫のもとに遊んで、推薦を受けた」とは、柳載に薦められたのである。」とするのは大變苦しい解釋である。また、『舊唐書』馬炫傳の記述は、馬炫の昇進が柳載の奏上に起因する事を伝えるだけで、馬炫・柳載・權德輿、この三者の關わりを示す材料とはなり得まい。

次に、權德輿から柳載へ宛てた書簡「與黜陟使柳諫議書」についてであるが、蔣氏は「柳載黜陟江東、表公試秘書省校書郎。公報書申謝。」と判断するに至った根據を、その文中より二箇所挙げておられる。

一つ目は書簡の冒頭で權德輿が柳載の知遇に感謝を述べるくだりである。

某月日試秘書省校書郎權德輿云云（中略）伏蒙以通世之舊、將獻狀受祿、感戴循環、不知所措。（『文集』卷四十二・與黜陟使柳諫議書）

柳載と權德輿の父權阜とは交流があり、それ以來の關係で、上表し祿を授けようとして下さり、感激は身體をめぐり、身の落ち着きどころがわかりません、と言う。この冒頭の謝辭から、「與柳諫議書」は柳載が幕下に招こうとした件に對しての返信であると察せられる。

續いて蔣氏が引用された部分は、權德輿が柳載に對し、人物登用のあり方についての意見を表明したくだりである。

閣下學一士、用一賢、必當躬驗聲實、精究終始。一旦以愚當薦士之目、誠衆多所未喻也。（中略）下情所守、在此而已。是以竟未獲拜謝者、以必所不當也。

閣下が人物を登用なさるには相手をつぶさに見極めねばなりません。ある日突然自分のような者を推薦なさるのは、人々にとって不可解な事であり、と權德輿は言う。自分を推舉するのは他者にとつて理解されないであらうとかしこまり、私の考えはその點にあるだけです、そういうわけでお會いしてお禮を申し上げるのは自分がそれに該當しないからです、と話を締めくくる。ただし、「下情所守、在此而已。」の「此」とは、實は蔣氏が省略された部分の後半を受けて「此」と言っているのです、今、補つて解釋する。

その省かれてゐる部分で權德輿は、

今者若以賢用所迫苟進一官、則傭書販舂亦足自給。必不敢以區區之身、上累名器。

今もし官を進めるのであれば他の手段で自給できますので、絶対に自分の事で御手を煩わせたりは致しません、と柳載のはからいを遠慮し、

敢拒黔敖之食、徐受山濤之恩。下情所守、在此而已。是以竟未獲拜謝者、以必所不當也。

黔敖が旅人の飢えを見て與えた食事（<sup>①</sup>）と同じような、ただ困窮しているという理由で頂戴する厚意は敢えて受け取らず、山濤が評價する人材をあらかじめ一覽にして奏上に備えていたように、有爲の者として推薦してもらえろという形で御恩を後に頂戴します（<sup>②</sup>）、と自分の考えを述べる。それを踏まえた上で、「下情所守、在此而已。」自分の考えはそこにあるだけだと言っているのである。

柳載の配慮に感謝しつつも、自分を推薦するのは他者には不可解である、自分の事であなたをわずらわせはしない、貧しさゆえに出された物は拒んで自分の能力によつて推薦される事を受ける、などと言う。本心であるかどうかはともか

く、權德輿が文中において自分を能力のない者と稱するのは、單なる謙遜にとどまらず、柳載のすすめを辭退する理由として強調されている點をも考慮せねばなるまい。

この書簡は、權德輿が柳載の心遣いを遠慮する事を傳えたものである。無論、その一事のみをもつて、權德輿が柳載の幕に入っていないとは斷言できず、「與柳諫議書」が書かれた時點では辭退している、とまでしか言えない。しかし、權德輿の側に見える柳載との關係を示す資料はこの文章だけであり、柳載の側に到つては權德輿との關係を裏付けけるものは見當たらない。また、『舊唐書』や『新唐書』などから兩者の接點を見出す事もできない。權德輿が柳載の幕下に入ったと見るのは、現今に傳わる資料から考えて、可能性は極めて低いと言わざるを得ないであろう。

## 二

建中元年初頭の時點で、權德輿が柳載の幕下に招かれたとは考えにくい。また、蔣氏が指摘されたように、韓洄は黜陟使として赴任しておらず、權德輿がそのもとで實務を担当した事も有り得そうにない。だがしかし、權德輿が韓洄に招かれ官についたと記す『舊唐書』などの文章も、現に目の前にある。これらはどう解釋すべきであるのか。

一見矛盾したその問題の解決を圖るため、この段以降では、韓洄の行狀において權德輿が「韓公故吏」と自稱する點から、權德輿と韓洄との關係に検討を加える。

權德輿が韓洄の故吏であると言った點に關しては、中原氏が前掲の論文中において鍵括弧をつけ注目されているが、この故吏という言葉は、權德輿と韓洄とがどのような關係で結ばれた間柄であつたのかを端的に示す、重要な一言である。さらなる注意が拂われねばならない。

故吏とは「以前の屬吏」ほどに日本語譯されようが、内包する意味はそう單純なものではない。通常、故吏と用いられた場合、それは辟召者に對するその者の立場を言うからである。ここで言う辟召者とは、自らの下僚の任命權を有する者を指す。人材を自分の部下として登用する「辟召制」、この人事制度が上司と部下の間に存在し、そこではじめて「辟召者」「故吏」という關係が成立するのである。よつて、「故吏」とあれば、誰かに招聘された屬吏である、あるいは屬吏であつた、と考えるのが妥當である。(一)

しかしながら、權徳輿と韓洄との關係は、召した本人が任地へ赴いておらず、權徳輿が韓洄のもとで勤めたときのみならず、特殊なものである。そして、現存する資料からは、權徳輿が別の時期に韓洄の招きに應じていた可能性を見出す事もできない。權徳輿と韓洄との接觸時期は建中元年のみに絞られるのである。

召した者と召された者が顔を合わせていないにもかかわらず、權徳輿は「韓公故吏」と自稱している。そのような場合でも辟召者と故吏という關係が成立するのであるか。當時、そのような考えが一般に通用したのであるか。

この點について、判斷の参考とするに足る文章が、中唐の人、杜佑によつて編まれた『通典』に見える。「召しを被り未だ謁せざれども故吏と稱するの議」がそれである。卷六十八（禮二十八・沿革二十八・嘉禮十三）に採られたこの項では、後漢の孔融が「三府の辟する所、故吏と稱する事」を奏上したその主張を記している。この文章は、招聘されても役所にて召した相手に拜謁していなければ故吏とは言えないとの主張に對し、そうではないと反論した内容のものである。まずはじめに孔融は、

臣惟古典、春秋、女在其國稱女、在途稱婦。然則在途之臣、應與爲比。穀梁傳曰、天子之宰、通於四海。三公之吏、不得以未至爲差。

『春秋』に見える「嫁ぐ道中にあつては「女」は「婦」と稱する」事<sup>①</sup>、つまり、結婚を済ませていない身でも嫁ぎ先へ行くまでの道中で夫となる相手に接すれば、自國領内にある時のように「女」とは言わず「婦」と自稱する事を引き合ひに出す。そして、『穀梁傳』に「天子の執政者は全土に通じる。」とある記述<sup>②</sup>と照らし合わせれば、天下の政をつかさどる三公の部下にとつてはどこにいてもそこは「天下」であるから、たとえ勤め先に至つておらずともその立場にないとする事はできない、と唱える。續いて、

狐突曰、策名委質、貳乃辟也。奉命承教、策名也。昔公孫嬰齊卒於狸蜃、時未入國。魯君以大夫之禮加焉。傳曰、吾固許之、返爲大夫。延陵季子解劍帶徐君之墓、以明心許之信。況受三公之招、修拜辱之辭、有資父事君之志耶。

春秋時代末、重耳についた息子と呼び戻すよう晉の懷公に迫られた時の狐突の「臣下となれば二心あるのは罪である。」との發言<sup>③</sup>を挙げ、命令や教えを承るのが臣下となる事であると言う。かつて、歸國すれば大夫にすると約束したものの入國前に亡くなつてしまつた嬰齊に對し魯の成公は言葉どおり大夫の禮を加えた一件<sup>④</sup>、吳の季札が使者に出て徐の

國を通過した折、その國君が自分の劍を心中欲しているのを悟り、役目を終えてから贈呈しようと心に決めたが、歸途立ち寄ると徐君はもう亡くなっていたので劍を塚の木にかけ初志を貫いた故事<sup>16</sup>など、信を全うした逸話を列挙する。そして、個人としての態度ですら見るべき例がある事を強調した上で孔融は、ましてや招聘を承知するのは父を助け君に仕えるという志が有つての事ではないか、三公の辟召を承知する事は治世に関わることであり、個人間の信義を示す事より重い意味を持つてゐるのだ、と言うのである。そして最後に、

臣愚以爲禮宜從重、三公所召、雖未執職、便爲故吏。

禮とはより重い意義を有する方に従うべきで、三公の辟召を受諾したのであれば職に従事していなくともその身は辟召者の故吏なのである、と記し、自説を述べ終える。

孔融は召された者が召した者に目通りする事よりも官に就くことを承諾する方がより重いと考え、招聘を承諾すればその時点で「辟召者」「故吏」という關係が発生し效力を持つ、とみなしたのである。これは、無論、中唐より溯ること六百年という古い時代のものの方ではあるが、記事を採録した杜佑が中唐期の人物である點を見逃すわけにはいかない。しかも、この説は「嘉禮」として採られているのである。唐代にあつても孔融の唱えた捉え方は有り得たとみなして支障ないであろう。

三

召した者と召された者とが顔を合わせていなくとも辟召者と故吏という關係は成立すると、前段で確認された。この段では、故吏が行狀を書くという事が何を意味するのか、との角度から、權德輿と韓洄との關係に觸れておく。

權德輿が「韓公故吏」と言うのは、前述したように「韓公行狀」においてである。故吏が亡くなつた辟召者の行狀を書く事象について、唐代ではどのような状況であつたのか、いくつかの資料を見ておきたい。

まず、中唐の人、李翱の言であるが、史官の記録が事實を得ていない事に對して意見を奏上したその中に、

今之作行狀者、非其門生、卽其故吏。（『李公文集』卷十・百官行狀奏）

今の行狀を書く者は、物故者の門生でなければ故吏である、と記されている。文中で「伏して以うに陛下卽位して十五



年」と言い、その後に憲宗の治世の功を列挙するところから考えて、この文章は元和十四年に書かれたものと判断される。唐代、少なくとも中唐においては、すべての例がそうであったとは斷言できないが、故吏が行狀を書く事は一般に廣く行なわれていたと認められよう。

では、唐代にあつて行狀とは何を目的として書かれる文章であつたのか。その點について、天寶年間から貞元時期の故實を主に記した『封氏聞見記』は、

太常博士掌誼。職事三品以上薨者、故吏錄行狀、申尙書省。考功校勘、下太常博士擬議訖、申省。省司議定、然後聞奏。（『封氏聞見記』卷四・定誼）

と傳える。當時は、太常博士が誼を掌つていた。職事官が三品官以上の物故者に誼する場合、故吏が行狀を作成して尙書省に提出し、その行狀を考功で吟味し、太常博士に下し議論させて終われば尙書省に報告させ、尙書省での議論が定まればその後に天子に申し上げる、これが誼を決定する手順であつた。その際、故吏の書いた行狀は亡くなった者の生前を知る參考資料の役割を果たしていたのである。

盛唐末期から中唐初期の人、獨孤及の文章にも同様の實情を傳えたくだりが見える。

『舊唐書』卷百八十五下や『新唐書』卷百四の呂誼傳に記載されている、永泰年間（七六五―七六六）の出來事である。宰相まで務めた呂誼が没した後、その故吏である嚴郢が役人に誼を求めた。當時太常博士であつた獨孤及は呂誼の誼を「肅」と定めた。しかし嚴郢は古くからの通例では宰相經驗者の誼は二文字であるから、「忠肅」と文字を増やすよう再度求めた。それに對し獨孤及は、そのようないわれはないとして退け「肅」のまま變えなかつた。

この時の、嚴郢が呂誼へ誼を賜わるよう求めた最初の文章は傳わらないが、獨孤及の「丞相故江陵尹兼御史大夫呂誼議」<sup>1)</sup>、それに對する嚴郢の「駁議呂誼」、嚴郢のその主張に再反論した「重議呂誼」、以上の三編は獨孤及の別集である『昆陵集』卷六に收められている。<sup>2)</sup> このうちの「重議呂誼」において、獨孤及は故吏と行狀と誼との關係を以下のよう

に言っている。

謹按舊儀、凡歿者之故吏、得以行狀請誼於尙書省。而考行定誼、則有司存。朝廷辨可否、宜在衆議。

舊來の例に照らせば、おおよそ亡くなった者の故吏は、行狀でもって誼するよう尙書省に願ひ出る事ができるが、行いを

評價し諡を定める事は、それを担当する役人に存するのである、朝廷が諡の可否を判断するのは、衆議に在るべきである、と。この記述から、故吏は行狀を尙書省に提出し、故人に諡するよう求める場合のあった事が知られる。そしてその行爲は、『封氏聞見記』の記述と一致し、李翱が「行狀を書く者は故吏」と述べる点とも符合しよう。

亡くなった時、韓洄の散官は從四品上の大中大夫であつたが、從三品の職事官である國子祭酒を務めていた。權德輿は「韓公行狀」において、

三月日、故大中大夫守國子祭酒潁川縣開國男賜紫金魚袋贈戶部尙書韓公故吏某官某、謹上尙書考功。(中略) 謹譔錄所履、布諸有司、請徵叔發之諡、以叶周公之法。謹上。

尙書考功に行狀をたてまつり、謹んで經歷を選び記し、それを役人に述べ、衛の公叔發の死後、子の戌が諡を衛君に求め貞惠文子と諡された故事<sup>『』</sup>にならい、周公の定めた諡法にかなうようされる事を願います、と言っている。

李翱の言葉、『封氏聞見記』の記述、獨孤及の主張から確認したように、故吏が亡くなった辟召者の行狀を書き、それを尙書省へ提出し諡を求める事は、當時廣く行なわれていたのである。であれば、韓洄に對する自らの立場を「韓公故吏」と言う權德輿が韓洄の行狀を書き諡を賜わうようにと尙書省へ願ひ出ているからには、雙方の間柄は「辟召者」「故吏」であつたし、またそれは社會的に承認される關係であつたと考えられるのである。

#### まとめ

權德輿の初任官は誰のもとでの事であつたのか。一章で論じたように、①權德輿が柳載の招聘を謝絶する旨を述べた書簡を残している②兩者の接點を示す資料がその書簡以外に見出せない、という二點から考えて、柳載のもとでの事であると考えるのは難しい。また、權德輿が「韓公故吏」と韓洄の行狀で自稱する點が兩者の關係を知る上で重要な手がかりとなる事は、二章・三章において提示できたように思う。

後漢の頃には、辟召に應じたその時點で既に故吏と稱し得る立場となるとの捉え方があり、當時の事情を伝える資料を検討すれば、唐代でも許容される考えであつた事がわかる。であれば、權德輿が韓洄の故吏である事は當時の社會通念上否定されなかつたとみなし得るし、それは、建中元年に韓洄からの招聘に權德輿が應じた瞬間から成立したものであると

見て問題はない。

以上、検討してきた結果を踏まえ、やはり『舊唐書』の權德輿傳などが傳えるように、權德輿の官途は、建中元年、韓洄の幕に入った事にはじまると判断せねばならないであろう。

（注）

（1）『中國學報』七 韓國中國學會 一九六七年 二十三〜四十三頁

（2）『西北大學報』（社科版）總第二十三卷第八十一期 一九九三年第三期 六十八〜七十八頁

（3）『徐州師院學報』（哲學社會科學版）一九九四年第三期 七十六〜八十一頁

（4）『四川師大學報』一九九六年第三期 三十六〜四十二頁

（5）『唐都學刊』一九九七年第四期 二十六〜三十一頁

（6）傳璇琮 中華書局 一九八九年

（7）中原氏、王氏にも同様の指摘がある。

（8）中華書局 一九九五年

（9）齊大飢。黔敖爲食於路，以待餓者而食之。有餓者。蒙袂輯屨，貿貿然來。黔敖左奉食，右執飲，曰、嗟來食。揚其目而視之、曰、豫唯不食嗟來之食，以至於斯也。從而謝焉。終不食而死。（『禮記』檀弓下篇）

（10）この「敢拒黔敖之食、徐受山濤之恩。」については、論中のように解釋すべきかどうかかわからない。「敢えて黔敖の食を拒み、徐ろに山濤の恩を受けんや」と反語で読み、「苦しい時にあなたから差し出されたものを拒んでおいて、別の人が推薦してくれる恩の後から受けるだろうか、いやそんなことはしない」と解釋する事もできるように思われる。もともと、どちらの解釋であっても柳載の厚意を謝絶するという書簡の大意自體に變わりはない。

また、「山濤之恩」とは、以下の出來事に由來する。

濤再居選職十有餘年、每一官缺、輒啓擬數人、詔旨有所向、然後顯奏、隨帝意所欲爲先。故帝之所用、或非舉首。衆情不察、以濤輕重任意。或譖之於帝。故帝手詔戒濤曰、夫用人惟才、不遺疏遠單賤、天下便化矣。而濤行之自若。一年之後衆情乃寢。濤所奏甄拔人物、各爲題目。時稱山公啓事。（『晉書』卷四十三・山濤傳）

(11) 故吏や辟召制に關しては、主に以下の研究を參考にした。

鎌田重雄「漢代の門生・故吏」 東方學第七輯 一九五三 二五五～三八頁

五井直弘「後漢時代の官吏登用制「辟召」について」 歷史學研究十二 一九五四 二二一～三〇、四十二頁

川勝義雄「魏晉南朝の門生故吏」 東方學報二十八 一九五八 一七五～二百十八頁

西川利文「漢代辟召制の確立」 鷹陵史學第十五號 一九八九 二七～七十頁

(12) 女曷爲或稱女、或稱婦、或稱夫人。女在其國稱女、在塗稱婦、入國稱夫人。(『公羊傳』隱公二年九月)

(13) 天子之宰、通於四海。(『穀梁傳』僖公九年夏。あるいは『穀梁傳』僖公三十年冬)

(14) 九月、晉惠公卒。懷公命無從亡人。期期而不至、無赦。狐突之子毛及偃、從重耳在秦、弗召。冬、懷公執狐突、曰、子來則免。

對曰、子之能仕、父教之忠、古之制也。策名委質、貳乃辟也。(『左氏傳』僖公二十三年冬)

(15) 前此者、嬰齊走之晉。公會晉侯、將執公。嬰齊爲公請、公許之反爲大夫。歸。至于緄軫而卒。無君命不敢卒大夫。公至、曰、吾

固許之反爲大夫。(『公羊傳』成公十七年十一月)

(16) 季札之初使、北過徐君。徐君好季札劍、口弗敢言。季札心知之、爲使上國、未獻。還至徐。徐君已死。於是乃解其寶劍、繫之徐

君冢樹而去。從者曰、徐君已死。尙誰予乎。季子曰、不然。始吾心已許之、豈以死倍吾心哉。(『史記』卷三十一・吳太伯世

家)

(17) 『毘陵集』では嚴郢の議とそれに對する獨孤及の議に題がないため、『文苑英華』卷八百四十の記載に據った。

(18) 公叔文子卒。其子成請諡於君、曰、日月有時、將葬矣。請所以易其名者。君曰、昔者衛國凶飢。夫子爲粥與國之餓者、是不亦惠

乎。昔者衛國有難。夫子以其死衛寡人、不亦貞乎。夫子聽衛國之政。修其班制、以與四隣交、衛國之社稷不辱、不亦文乎。故謂

夫子貞惠文子。(『禮記』檀弓下篇)